

元気な北海道農業に触れて

～菱肥会ブロック交流会開催

去る7月18～19日、恒例の菱肥会ブロック交流会が北海道にて実施された。全国より会員20社が出席、賛助会員および事務局を合わせ総勢49名の参加を得て盛会となった。今回の交流会は北海道菱肥会が中心となって企画運営を行い、北海道の基幹作物である麦に焦点をあて、道内3箇所の視察を実施した。

農事組合法人 勝部農場・・・経営費の増加を押さえる工夫 18日にまず訪問したのは、千歳空港より車で



約1時間の距離に位置する夕張郡栗山町の勝部農場。現在150ヘクタールの耕地で小麦を生産している、日本最大規模の小麦単作経営の農場だ。この内、25ヘクタールで生産している品種「ゆめちから」は、近年開発された北海道初の超強力秋まき小麦優良品種で、製パン適性とブレンド適性を兼ね備えた注目の品種だ。栽培は2012年に始まったばかりであるが、道央や十勝地方で作付けが広がっている。当日は農場代表の勝部征矢氏より圃場を前にしながら農場経営に関する話を伺った。

(次ページ上段へ続く)

一刻も早い復旧を～九州北部豪雨

今月3日の豪雨に続き、11～14日に記録的雨量により大きな被害を与えた九州北部豪雨。未だ被害の全容は明らかになっていないが、既に福岡・熊本・大分で30名にものぼる人命が失われた。農業に関する被害状況については、熊本県によると23日に把握された被災した農地および農業施設は3,815箇所であり、阿蘇地域では500ha以上の圃場が冠水した模様だ。大分では19日現在で797箇所の農業関係被害が報告されており、福岡でも河川の氾濫による施設の損壊などが起きているようだ。



農作物についても今後の病害が懸念される。九州では今月の豪雨以外にも6月から各県で集中豪雨の被害にあっている。長崎県では例年7月10日頃に終わっている馬鈴薯の収穫作業に遅延が生じており、大雨によって一部に腐れや皮の硬化などの被害が出ているという。さらに高温多雨時期に発生しやすい炭疽病(たんそびょう)が多発することが予測されている。気象庁研究所によると、今回の豪雨は停滞していた梅雨前線の南に湿った強い南西からの風が持続的に吹きこみ、積乱雲が繰り返し発達する「バックビルディング」現象が要因であるとのこと。被害の全容判明と、早期の復旧を祈念してやまない。(写真は南阿蘇郡阿蘇村付近で冠水する圃場)

(前ページ上段より続く)

殊に農業機械に関しては、海外より個人輸入するものもあるとのこと。また、メンテナンスは主に自社で適切に実施することにより、機器の寿命を延ばし、維持コストや更新による経営費の増加を抑える工夫をされている。

有限会社 大牧農場・・・ミネラルバランスの良い土作り 翌19日は河東郡音更町の大牧農場を訪ね、代表取締役 五十川勝美氏より話を伺った。大牧農場は、加入団体と協力農家からなる405ヘクタールを耕作する。生産する農産物は主に小麦や馬鈴薯、豆類や根菜など。「土づくりと栄養と美味しさ」をキーワードに、当農場は毎年土壌分析を実施。有機肥料を中心に自家配合した肥料を用いてミネラルバランスの良い土作りを行っている。また、入植直後から大変苦勞されながら暗渠排水等で長い年月をかけて土地改良に成功された話は、感動的であった。麦については、2,000トン貯蔵可能な乾燥サイロを自前で持たれている。

株式会社 山本忠信商店・・・生産者と消費者の顔の見える関係作り 19日は続いて、同じ音更町にある(株)山本忠信商店の製粉工場「十勝 夢 mill」と本社を訪問。同社は、十勝地方が国産小麦の四分の一を生産しながら殆どが域外に運ばれ、他産地の小麦とブレンドして使用されている現状に鑑み、生産者と消費者を結び付ける取り組みの一環として、地元で製粉工場を作った。これにより地元十勝産の小麦が100%使用された製品が作られ、地産地消、更には十勝ブランドの全国へのPR推進が図られている。また、新品種「ゆめちから」も積極的に取り組んでいる。

地場のレア物野菜で取り組む拡販～青果流通の新潮流

量販店が青果を仕入れる際にアイテムを選定する基準の一つに、価格・量・品質の安定が挙げられる。この基準は大手量販店では概ね同じであるが、結果として品揃えの独自性が少ないということになってしまい、いきおい各社は価格競争に走ることになる。最近では他社との差別化を図るために規格外品を並べ、客寄せに利用している量販店も見かけるが、デフレ下の価格の低下傾向は止まらず、量販店の収益を圧迫している状況だ。このため量販店は独自性のある店舗づくりと売上向上につながる対策を講じることが必要となっている。

その対策の一つとして最近脚光を浴び始めたのが、従来、生産地でしか消費されていなかった珍しい農産物の取り扱いだ。珍しい農産物は店舗の独自性を演出し、売上にも貢献してくれる。しかし、こういった農産物は高食味にも関わらず、栽培が難しく収量が少ないということや、棚持ちが悪く形が物流に向かないというデメリットがある。また、これまで量販店の仕入れ基準にも合わないことから、生産地域外への販路は限られていた。

馬込半白胡瓜まごめはんしろきゅうりはこのような農産物の一つだ(写真)。東京都大田区で育種され栽培されてきた品種で、皮が柔らかく甘みもあり、地元では人気がある。最近ではネットで情報を得ることが出来るようになった為、わざわざ産地を訪れて購入する消費者も少なくない。これに目を付けた量販店が馬込半白胡瓜を取り扱い始めたところ、既存商品の売れ行きも伸びて相乗効果が図れているという。同様の動きは他の量販店にも広まり始めており、青果物の流通に新たな波紋を投げかけるかも知れない。



昨夏、東京都内では電力不足により各所で節電が実施され、夜道も薄暗い状態でした。今夏は日中のピーク帯を除いては影響が少ない事もあり、夜道は明るく保たれています。節電する上で気をつけたのが屋内での熱中症。無理せずエアコンを利用しながらも節電に気を配るのであれば、まずはフィルターのお掃除をするといいそうです。目詰まりしているものに比べて、掃除をすると6%の節電になるそうですよ。

編集事務局：小田、助川

電話：03-5275-5511/E-mail：macjournal@mcagri.co.jp URL <http://www.mcagri.jp>